OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アフリカ諸語における「形容詞」について : ヨルバ語とバントゥ諸語を例に
Author(s)	小森, 淳子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2012, 23, p. 167-185
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アフリカ諸語における「形容詞」について

― ヨルバ語とバントゥ諸語を例に ―

小森　淳子

0. はじめに

「形容詞」とは事物の性質や状態を表す語で，一般に名詞や動詞とは異なるカテゴリーとして捉えられる品詞をさす。しかし，どの言語にも形容詞という品詞が認められるわけではなく，いわゆる「形容詞」が名詞の一部として，あるいは動詞の一部として分類される言語も多い。独立した形容詞というカテゴリーが認められる言語においても，その数は名詞や動詞に比べて少ない。

アフリカの諸言語においては，その一大特徴は「形容詞の欠如にある」（清水 1988:350）と言われるように，形容詞というカテゴリーは認められにくく，形態的には名詞や動詞に分類される語が「形容詞」として用いられることが一般的である。たとえばヨルバ語では，自動詞の一群の中に事物の性質や状態を表す語が含まれており，叙述において，多くの「形容詞」が動詞と同じ振る舞いをする。一方，バントゥ諸語では「名詞クラス」と呼ばれる接頭辞による名詞の分類があるが，「形容詞」は修飾される名詞と同じ接頭辞をとるので，形態的には名詞と同じ形になる。印欧諸語において，形容詞が名詞と同じ活用をし，名詞と同類に分類できることと似ている（松本 2006）。

本稿では，以上のような認識にもとづいて，ヨルバ語のように動詞として分類される「形容詞」と，バントゥ諸語のように名詞として分類される「形容詞」について，それぞれの特徴を概観し，アフリカ諸語における「形容詞」というカテゴリーについて考察していく。

1. 形容詞の機能と意味分類

「形容詞」の統語上の機能は大きく分けて二つある。一つは「この家は大きい」というように事物について叙述する機能であり，「叙述用法」(predicative) と呼ぶことができる。もう一つは名詞を修飾する機能であり，これは「修飾用法」(attributive) と呼ぶことができる。「修飾用法」は「限定用法」と呼ばれることもあるが，それは形容詞が名詞を修飾する場合，たとえば「大きい家」というのが「家」の中でも「大きい」という性質をもつものを限定しているように，その名詞が指す事物の集合の中から形容詞が指す性質をもつ事物を限定して指示する機能があるからである。

修飾用法にとって効率的であるのは，形容詞が修飾される名詞と呼応して名詞と同じ形態を示すことである。バントゥ諸語の「形容詞」は，修飾する名詞と同じクラスの呼応を示すので，修飾用法に効率的である。また名詞と同じ形態を示すので，形容詞一語で，たとえば「大きい物」というように，単独で名詞になることもできる。形容詞が名詞的な形態である場合，叙述用法においては Be 動詞（に相当する動詞）やコピュラが用いられるのが一般的である。

一方，叙述用法にとって効率的であるのは，形容詞が動詞と同じように活用する場合である。その特徴がよく見られるのが，ヨルバ語をはじめとする西アフリカの諸言語である。ヨルバ語の「形容詞」の基本的な形は動詞であり，「主語＋自動詞」という組み合わせで，たとえば「ゾウは大きい」というように，主語の事物の特徴を叙述する。「形容詞」が動詞的である場合，修飾用法においては関係節を用いたり，動詞から「連体形」を派生させて用いたりするのが一般的である。動詞から派生される連体形は言語によってさまざまな形態を示すが，ヨルバ語では動詞の一部を重複させる動名詞形が用いられる。

「形容詞」が表すとされる代表的な意味については，Dixon(2004) が中心的なものから周辺的なものまで 13 に分けて挙げている。以下にその意味分類をあげる。1〜4 が中心的な意味，5〜7 が周辺的な意味で，8〜13 は形容詞として表す言語もある，というものである。語例には，挙げられていた英語の例に加えて日本語の「い」形容詞の例も挙げておく。

＜形容詞の意味分類＞　(Dixon 2004:3-5)

1. Dimension（大きさ，広がり）

big, small, long, tall, short, wide, deep, etc.

大きい，小さい，長い，短い，高い，低い，広い，狭い，深い，浅い・・・

2. Age（年齢，新旧）

new, young, old, etc.　　新しい，古い，若い，幼い・・・

3. Value（価値，善悪）

good, bad, lovely, atrocious, perfect, proper(/real), odd, strange, curious, necessary, crucial, important, lucky, etc.

良い，悪い，愛らしい，かわいい，素晴らしい，美しい，きれい，汚い，醜い，ひどい，危ない，安い，おいしい，まずい，おもしろい・・・

4. colour（色）

black, white, red, etc.　　白い，黒い，赤い，青い，（濃い，薄い，暗い，明るい）・・・

5. Physical property（物理的特徴）

hard, soft, heavy, wet, rough, strong, clean, hot, sour, well, sick, tired, dead, absent, etc.

固い，柔らかい，重い，軽い，強い，弱い，太い，細い，丸い，四角い，鋭い，

熱い，冷たい，臭い，うるさい，甘い，辛い，酸い，苦い，粗い，細かい・・・

6. Human propensity（人間の性質，感情）

jealous, happy, kind, clever, generous, cruel, proud, ashamed, eager, etc.

嬉しい，悲しい，楽しい，寂しい，苦しい，辛い，賢い，優しい，恐い，

恥ずかしい，誇らしい，おとなしい・・・

7. Speed（速さ）

fast, quick, slow, etc.　　早い，速い，遅い・・・

8. Difficulty（難易）

easy, difficult, tough, hard, simple, etc.　　難しい，易しい，きつい，厳しい・・・

9. Similarity（相違）

like, unlike, similar, different(/strange), other, etc.　　等しい

10. Qualification（質的）

definite, true, probable, possible, likely, usual, normal, common, correct, appropriate,

sensible, etc.　　正しい

11. Quantification（量的）

all(/whole), many, some, few, only, enough, etc.　多い，少ない，乏しい，ない・・・

12. Position（位置，遠近）

high, low, near, far/distant, right, left(/strange), northern, etc.　近い, 遠い, 高い, 低い・・・

13. Cardinal numbers（数）

first, last, etc.

本稿ではこれらの意味を表す語を「形容詞的な意味を表す語」として考察の対象とする。言語によってはそれが動詞であったり名詞であったりするが，その場合，たとえば「形容詞的な意味を表す動詞」などのように呼ぶことにする。また以下に，ヨルバ語やスワヒリ語の語例の一覧を示す時には，上の 5，6 の分類を「物の状態」や「味」，「人間の状態・性質」などの項目に分けて示す。

2. ヨルバ語の「形容詞」

ヨルバ語では「形容詞」というカテゴリーは認められにくく，動詞と，表意音などの名詞によって形容詞的な意味が表される。形容詞的な意味を表す動詞には，次頁の表 1 にあげるようなものがある。一般の動詞と同じように主語の後ろにきて述部をなし，アスペクトや否定の標識をつけることができる。ヨルバ語にはテンスの標識がないので，これらの動詞が無標で述部にくると，文脈がなければ現在の状態に解釈される。否定は動詞の前に否定の標識 kò をおく。以下に例をみてみよう[1)]。

(1)a. ọmọ náà tóbi　　その子供は大きい。
　　子ども　その　大きい

　b. ọmọ náà kò tóbi　　その子供は大きくない。
　　子ども　その　否定　大きい

(2)a. ẹja náà dùn　　その魚はおいしい。
　　魚　その　おいしい

　b. ẹja náà kò dùn　　その魚はおいしくない。
　　魚　その　否定　おいしい

このようにヨルバ語では，叙述においては動詞が用いられるのが一般的である。自動詞の他に目的語をとる動詞 ní「持つ」が用いられることもある。この場合，目的語として状態や属性，物を表す名詞が後ろにくる。次のような例がある。

(3)a. obìnrin náà ní ẹwà　　その女性は美しい。
　　女性　その　持つ　美しさ

　b. ọkùnrin náà ní agbára　　その男性は強い。
　　男性　その　持つ　力

　c. olùkọ́ náà ní òkìkí　　その先生は有名だ。
　　先生　その　持つ　名声

---

1) ヨルバ語の音韻表記は次の通り。口母音 i, e, ẹ [ɛ], a, ọ [ɔ], o, u，鼻母音 in [ĩ], an/ọn [ɔ̃], ẹn [ɛ̃], un [ũ]，子音 b, d, f, g, gb [gb], h, j [ʤ], k, l, m, n, p [kp], r, s, ṣ [ʃ], t, w, y [j] 。ヨルバ語は High, Mid, Low の 3 つのトーンを区別する。トーン符号は母音あるいは成節鼻音の上に，Hは [´]，Lは [`]，M には何もつけない。グロスは基本的に日本語で記すが，3 人称単数の代名詞（主格／対格／所有格）は 3SG ，コピュラ動詞は COP と記す。

表 1　ヨルバ語の形容詞的な意味を表す自動詞

意味	動詞	動名詞形（不規則形）	名詞＋動名詞形の語例
【大きさ】（大小，長短，軽重など）			
大きい	tóbi	títóbi	ọmọ títóbi　大きい子ども
小さい	kéré	kékeré	ọmọ kékeré　小さい子ども
ちっちゃい	wẹ́	wẹ́wẹ́	ọsàn wẹ́wẹ́　ライム
短い・低い	kúrú	kúkúrú	ọmọ kúkúrú　背の低い子
長い	gùn	gígùn	ìrìn-àjò gígùn　長旅
高い	ga	gíga	ilé-ẹ̀kọ́ gíga　高等学校
重い	wúwo	wíwúwo	ìwé wíwúwo　重い本
薄い	fẹ́lẹ́	fífẹ́lẹ́	ìwé fífẹ́lẹ́　薄い本
深い	jìn	jíjìn	odò jíjìn　深い川
【新旧】			
新しい	tuntun	tuntun / títun	aṣọ tuntun / títun　新しい服
古い	gbó	gbígbó	aṣọ gbígbó　古い服
【価値】（善悪，美醜など）			
良い	dára	dáadáa / dídára	ìròhìn dáadáa / dídàra よいニュース
悪い	burú	búburú / burúkú	ìròhìn búburú/burúkú　悪いニュース
きれい	mọ́	mímọ́	bíbélì　mímọ́　聖書
汚い	dọtí	dídọtí	aṣọ dídọtí　汚い服
完璧だ	pé	pípé	ọmọ pípé　完璧な子ども
高い（高価だ）	wọ́n	wíwọ́n	ẹ̀wa wíwọ́n　高い豆
【色】			
白い	fúnfún	fúnfún	aṣọ fúnfún　白い服
黒い	dúdú	dúdú	ẹ̀wa dúdú　黒い豆
赤い	pupa	pupa	ẹyẹ pupa　赤い鳥
【物の状態】（温度，硬軟など）			
冷たい	tutù	tútù	omi tútù　冷たい水
熱い	gbóná	gbígbóná	omi gbígbóná　熱い湯

固い･厳しい	le	líle	ọtí líle 強い酒 ọ̀rọ̀ líle きつい言葉
固い･頑丈な	yi	yíyi	ẹran yíyi 固い肉
柔らかい	rọ̀	rírọ̀	ẹran rírọ̀ 柔らかい肉
鋭い	mú	mímú	ọ̀bẹ mímú 鋭いナイフ
なめらか, 輝く	dán	dídán	góólù dídán 輝く黄金
まっすぐ	tọ́	títọ́	ọ̀nà títọ́ まっすぐな道
熟れている	pọ́n	pípọ́n	ọsàn pípọ́n 熟れたオレンジ
乾いている	gbẹ	gbígbẹ	ẹja gbígbẹ 乾いた魚（干物）
【難易】			
難しい	ṣòro	ṣíṣòro	iṣé ṣíṣòro 難しい仕事
易しい	rọ̀	rírọ̀	iṣé rírọ̀ 易しい仕事
【量】			
多い	pọ̀	púpọ̀	oúnjẹ púpọ̀ たくさんの食べ物
【味】			
甘い･おいしい	dùn	dídùn	oúnjẹ dídùn おいしい食べ物
苦い	korò	kíkorò	tíì kíkorò 苦いお茶
酸い	kan	kíkan	ọsàn kíkan 酸いオレンジ
辛い	ta	títa	*oúnjẹ títa （辛い食べ物）
【人間の状態・性質】			
痩せている	tínrín	tínrín	ènìyàn tínrín 痩せている人
太っている	sanra	sísanra	ènìyàn sísanra 太っている人
賢い	gbọ́n	gbígbọ́n	*ọmọ gbígbọ́n （賢い子ども）
愚かだ	gọ̀	gígọ̀	*ọmọ gígọ̀ （愚かな子ども）
【遠近】			
遠い	jìnnà	jínjìnnà	*ibi jínjìnnà （遠い所）
近い	súnmọ́	sísúnmọ́	*ibi sísúnmọ́ （近い所）
【相違】			
違う	yàtọ̀	yíyàtọ̀	*ọmọ yíyàtọ̀ （違う子ども）

d. ìwé yìí ní ipọn　　この本は厚い。
本　この　持つ　厚さ

e. oúnjẹ náà ní ata　(= oúnjẹ náà ta)　その食べ物は辛い。
食べ物　その　持つ　唐辛子　　食べ物　その　辛い

「辛い」という叙述には，ní「持つ」＋ ata「唐辛子」と，自動詞である ta「辛い」を用いる表現の両方が可能であるが，実際には前者の方が一般的に用いられる。

修飾用法では，これらの動詞から作られる関係節や動名詞形が用いられる。関係節は関係詞 tí を用いて作り，名詞のうしろにおく。関係節の場合，どのような動詞でも関係節にして名詞を修飾することができる。

(4)a. ọmọ tí ó tóbi　　大きい子ども
子ども　関係詞　3SG　大きい

b. ẹja tí ó dùn　　おいしい魚
魚　関係詞　3SG　おいしい

c. obìnrin tí ó ní ẹwà　　美しい女性
女性　関係詞　3SG　持つ　美しさ

動名詞形は［動詞の初頭の子音＋í ］を重複させて作り，一般には「〜すること」という意味を表す。目的語をとる他動詞の場合は目的語を前置して名詞句をつくることができる。動名詞形の例をみてみよう。

(5)
lọ	「行く」	→	lílọ	「行くこと」
kà	「読む」	→	kíkà	「読むこと」
tóbi	「大きい」	→	títóbi	「大きいこと」
dùn	「おいしい」	→	dídùn	「おいしいこと」
ka ìwé	「本を読む」	→	ìwé kíkà	「本を読むこと／読む本」

形容詞的な意味を表す動詞の動名詞形は，名詞の後ろにおかれて修飾に用いられる。

(6)a. ọmọ títóbi　　大きい子ども
子ども　大きい（動名詞形）

b. ẹja dídùn おいしい魚

魚 おいしい（動名詞形）

しかし，修飾用法には用いられない動名詞形もある。表 1 の中の ta「辛い」や gbọn「賢い」，gọ「愚かだ」，jìnnà「遠い」，súnmọ́「近い」，yatọ「違う」などの動詞は，動名詞形自体を作ることはできるが，修飾用法に用いることはできない。

(7)a. * oúnjẹ títa （辛い食べ物）

食べ物 辛い（動名詞形）

b. * ọmọ gbígbọ́n （賢い子ども）

子ども 賢い（動名詞形）

c. * ọmọ gígọ （愚かな子ども）

子ども 愚かだ（動名詞形）

d. * ibi jínjìnnà （遠い所）

所 遠い（動名詞形）

e. * ibi sísúnmọ́ （近い所）

所 近い（動名詞形）

f. * ọmọ yíyatọ （違う子ども）

子ども 違う（動名詞形）

これらの動詞を修飾用法に用いる場合は，もっぱら関係節にして用いる。これらの動名詞形が修飾用法に用いられないのは，これらの動詞の意味が形容詞の中心的な意味から離れた周辺的なものであることと，個別の語彙的な慣用が関係していると考えられる。たとえば，どちらも同じような味覚を表す表現であるにも関わらず，「酸い」の動名詞形の修飾用法は可能で，「辛い」の動名詞形の修飾用法が可能でないのは，動詞の意味の問題ではなく，「辛い」の表現が，(3e)で見たように，ní「持つ」+ ata「唐辛子」という方が一般的であり，所有の接頭辞 oní- を用いて作られる名詞 aláta「辛い物」が修飾に用いられるからだと考えられる[2)]。

2) 所有の接頭辞 oní- は，名詞に付いて「～を所有する者」という名詞を作る。母音から始まる名詞につく時は i が落ちる（í がもつ H トーンは残る）。i 以外の母音から始まる名詞に付く時は，oní- の o は名詞の初頭母音に同化し，n は l に変化する。そこで，oní- ＋ ata「唐辛子」 → aláta「辛い物」となる。(9)の例の ọlọ́gbọ́n は，oní- ＋ ọgbọ́n「賢さ」からなっている。

(8) oúnjẹ aláta 辛い食べ物
食べ物 辛い物

gbọn「賢い」という動詞にも，所有の接頭辞を用いて作られる ọlọ́gbọ́n「賢い人」という名詞があり，それが修飾に用いられる。

(9) ọmọ ọlọ́gbọ́n 賢い子ども
子ども 賢い人

このような名詞は動詞によって異なり，gọ「愚かだ」から作られる名詞 òmùgọ「愚か者」は修飾には用いられない。

(10) òmùgọ / *ọmọ òmùgọ 愚か者 ／（愚かな子ども）
愚か者 子ども 愚か者

逆に，中心的な意味に近い動詞に見られる特徴として，動名詞形の「不規則形」とでも呼ぶべき形をあげることができる。形容詞的な意味を表す動詞の中には，規則的な形とは異なる動名詞形をもつものがあるが，その「不規則形」はそれぞれの動詞において個別に規則形から変化したものと考えられる。規則的な形と不規則形の両方をもつ動詞もある。たとえば dára「良い」という動詞の動名詞形は，規則的な形 dídára と不規則な形 dáradára (> dáadáa) があり，両方用いられるが，後者の方が一般的である。

(11)a. ọmọ náà dára その子供は良い。
子ども その 良い

b. ọmọ dídára / dáadáa 良い子供
子ども 良い（動名詞形）

色を表す動詞の場合，動名詞形は動詞と同じ形である。

(12)a. aṣọ náà fúnfún / aṣọ fúnfún その服は白い。 ／ 白い服
服 その 白い 服 白い（動名詞形）

b. ẹwa náà dúdú / ẹwa dúdú その豆は黒い。 ／ 黒い豆
豆 その 黒い 豆 黒い（動名詞形）

c. ẹyẹ náà pupa / ẹyẹ pupa その鳥は赤い。 ／ 赤い鳥
鳥 その 赤い 鳥 赤い（動名詞形）

上の(12)の例では，不規則な動名詞形が動詞の役割も果たしているように見える。おそらく語源的には重複していない形の動詞から重複した形の動名詞形が作られ，それが不規則形になり，さらにその後，それが修飾用法のみならず，叙述用法にまで用いられるようになったと考えられる。そのような経緯は推測できるものの，ここではあくまで動詞としてふるまうことができる形を動詞とし，修飾用法に用いられる形を動名詞形としておく。そして，規則的に作られる動名詞形とは異なるので「不規則形」であるとしておく。表 1 の 3 列目にはそれぞれの動詞の動名詞形をあげてあるが, 不規則形には下線をひいてある。これらの不規則形には, (11), (12)にあげた例の他に, kékeré「小さい」, wẹ́wẹ́「ちっちゃい」, kúkúrú「短い・低い」，tuntun / títun「新しい」，búburú / burúkú「悪い」，tútù「冷たい」，tínrín「細い」などがあり，修飾用法で頻繁に用いられてきた結果，語彙的に固有に変化した形になったと考えられる。このような不規則形の意味カテゴリーをみてみると,「大きさ」や「新旧」,「価値」,「色」や「物の状態」など，形容詞の中核的な意味が多いといえよう[3)]。

以上の不規則形は，それでも対応する動詞があるが，対応する動詞が見られない語彙もある。ńlá「大きい」と rere「良い」という語である。

(13)a. ọmọ ńlá 大きい子ども
子ども 大きい

b. ọmọ rere 良い子ども
子ども 良い

上にみた不規則形と同じく，これらも形容詞の中核的な意味カテゴリーに含まれる。これらも語源的には何らかの動詞の動名詞形であったのではないかと考えられるが，現在で

3) 「多い」を表す動詞 pọ̀ の動名詞形は púpọ̀ という不規則形であるが，これは「形容詞」というより「副詞」的な意味を獲得しつつある。púpọ̀ を修飾用法で用いることはできるが,「たくさんの～」という場合，普通は pọ̀ から派生された名詞 ọ̀pọ̀ や ọ̀pọ̀lọpọ̀（いずれも「多数」という意味）を用いる。púpọ̀ は「とても」という副詞的な意味に用いられることが一般的になっている。これは「多い」という形容詞が中核的な意味から遠い「量的」な意味を表すことと関係していると考えられる。
例）ọ̀pọ̀lọpọ̀ iṣẹ 「たくさんの仕事」
ọ̀pọ̀ ènìyàn 「たくさんの人」
ọmọ náà dára púpọ̀ 「その子供はとても良い」（副詞的な用法）

は対応する動詞はない(Madugu 1976:99)。動詞の方は tóbi「大きい」や dára「良い」にとって代わられたと言える。これらの語は修飾用法にしか用いられず，叙述用法には用いられない。

ところで, 形容詞的な意味を表す名詞には, 物の状態を表す表意音(ideophone)や,「重要」という意味を表す語 pàtàkì などがある。表意音はオノマトペのように音表象を用いて事物を叙述する語である。ここでみる形容詞的な意味を表す表意音には, rọbọtọ「太っている」, gbàndù「大きい」，làntì「大きい」，pẹlẹbẹ「薄い，痩せている」などがあげられる。これらの名詞は他の名詞を後ろから修飾することができる。

(14)a. ọmọ gbàndù 大きい子ども
子ども 大きい

b. iṣẹ pàtàkì 重要な仕事
仕事 重要

これらの語が叙述に用いられる時は，コピュラ動詞の補部として現れる[4)]。一方，(13)にあげた 2 つの語はコピュラ動詞の補部にはなれない。

(15)a. ọmọ náà ṣẹ gbàndù その子どもは大きい。
子ども その COP 大きい

b. iṣẹ yìí ṣẹ pàtàkì この仕事は重要だ。
仕事 この COP 重要

c. * ọmọ náà ṣẹ ńlá / rere （その子どもは大きい／良い。）
子ども その COP 大きい 良い

コピュラ動詞の補部になれるのは名詞であるので，ńlá と rere の 2 語は名詞とは異なるカテゴリーを形成していると言えよう。あえてヨルバ語に「形容詞」というカテゴリーを作るなら，この 2 語をまず，そこに分類することができるだろう。

4) ヨルバ語のコピュラ動詞には 2 種類あり，jẹ は恒常的な状態や特性を表す場合に用いられ，ṣẹ は一時的な状態や特性を表す場合に用いられる。いずれの動詞もその補部には名詞をとる。
例) a. ọmọ náà jẹ ọkùnrin その子どもは男だ。
b. ọmọ náà ṣẹ ọkùnrin その子どもは男らしい。
子ども その COP 男

3. バントゥ諸語の「形容詞」

バントゥ諸語の大きな特徴の一つは,「名詞クラス」と呼ばれる名詞の分類体系をもつことである。名詞は基本的に名詞接頭辞と名詞語幹からなっており，名詞接頭辞によってクラスが分類される。名詞を修飾する語句も修飾する名詞のクラスに呼応した形になるのが基本である。

バントゥ諸語には「形容詞語幹」と呼べるものがあるが，修飾する名詞と同じ接頭辞をとるので，形態的には名詞と同じ形になる。スワヒリ語には接頭辞をとる形容詞語幹に加えて，形容詞的な意味を表すアラビア語源の語がある。これらは接頭辞をとらず，不変化の形である。次頁の表 2 にスワヒリ語の接頭辞をとる形容詞語幹，表 3 にアラビア語源の形容詞的な意味を表す語をあげる。

表 2, 3 の中の語はいずれも，修飾用法に用いられる場合は名詞の後ろにおかれる。叙述用法に用いられる場合は，不変化形のコピュラ ni か Be 動詞に相当する動詞 -wa が用いられる。(16)に修飾用法の例，(17)に叙述用法の例をあげる[5)]。

(16)a. m-toto m-kubwa / ki-kombe ki-kubwa 大きい子ども／大きいコップ
NP1CL-子ども NP1CL-大きい NP 7CL-コップ NP7CL-大きい

b. m-toto safi / ki-kombe safi 清潔な子ども／きれいなコップ
NP1CL-子ども 清潔な NP7CL-コップ 清潔な

(17)a. m-toto huyu ni m-kubwa この子どもは大きい。
NP1CL-子ども この(1CL) COP NP1CL-大きい

b. i-ta-ku-wa sahihi ku-sema hivyo そのように言うのは正しいだろう。
SM9CL-FUT-INF-Be 正しい INF-言う それ(8CL)

アラビア語からの借用語が少なからずあるということは，スワヒリ語本来の形容詞の不足を補っていると言えるが，そもそもバントゥ祖語の段階から，派生されたのではない形容詞語幹は少ない。バントゥ祖語の本来の形容詞語幹としては「良い, 悪い, 長い, 短い‥」などの語幹と，1 から 5 の数詞などが見られる程度で，その他の形容詞語幹は動詞や表意

5) バントゥ諸語のグロスは以下の通り。Be Be 動詞に相当する動詞の基本形，CL クラス（数字はクラス番号），COP コピュラ，FUT 時制接辞・未来，INF 不定形接辞，NP 名詞接頭辞，PE 完了語尾，PP 代名詞接頭辞，PRS 時制接辞・現在進行，REL 関係主語接辞，SM 主語接辞。また，バントゥ諸語の動詞の基本形を示す時は基本語尾-a がついた形で示し, 例文内でも-a は分けて表記しない。

表 2　スワヒリ語の接頭辞をとる形容詞語幹

【大きさ】（大小，長短，軽重など）
-kubwa　大きい　-dogo　小さい　-refu　長い･高い　-fupi　短い･低い -zito　重い　-epesi　軽い　-nene　太い　-embamba　細い　-pana　広い
【新旧】　-pya　新しい　-kuukuu　古い
【価値】（善悪，美醜など）
-zuri/ -ema 良い　-baya/ -ovu 悪い　-zima 完全な　-kuu 偉大な　-chafu 汚い
【色】　-eupe　白い　-eusi　黒い　-ekundu　赤い
【物の状態】（温度，硬軟など）
-bovu　腐った　-kali　鋭い　-gumu　固い　-kavu　乾いた -bichi　生の･未熟の　-bivu 熟した　-angavu　明るい･透明な
【味】　-tamu　甘い･おいしい　-chungu　苦い
【人間の性質】
-pole　おとなしい　-choyo　ケチな　-oga 臆病な
【相違】　-ingine　他の
【量】　-ingi　多い　-chache　少ない
【数】
-moja　一つの　-wili　二つの　-tatu　三つの　-nne　四つの　-tano 五つの -nane　八つの　-ngapi　いくつの

表 3　アラビア語源の形容詞的な語

【価値】（善悪，美醜など）
safi　清潔な　ghali　高価な　halisi　本物の　maarufu/ mashuhuri　有名な sahihi 正しい　muhimu　重要な　maalum　特別な　hatari　危険な
【物の状態】（温度，硬軟など）
baridi　冷たい　laini　柔らかい
【人間の性質】hodari　有能な　jasiri　勇敢な
【難易】 rahisi　易しい
【相違】 sawa　同じ

音から派生されたものと考えられる[6]。(18)のスワヒリ語の形容詞語幹は，通時的には動詞や表意音から派生されたと考えられる (Schadeberg 2003: 81, 150)。

(18)

-ovu「悪い」	＜	* -bol-	「腐る」
-bovu「腐った」	＜	* -bol-	「腐る」
-refu「長い」	＜	* -dai-p-	「長い＋動詞派生辞 -p-」
-gumu「固い」	＜	* -gʊm-	「乾く」
-kavu「乾いた」	＜	* -kal-	「乾く」
-kali「鋭い」	＜	* -kál-	「尖る」
-kuukuu「古い」	＜	* -kʊl-	「成長する」
-eupe「白い」	＜	* -elu (< * -jél-ʊ)	「明るい」＋ * pe（表意音「白い」）
-eusi「黒い」	＜	* -elu (< * -jíl-ʊ)	「暗い」 + * pi（表意音「黒い」）
-nene「太い」	＜	* -(né)ne	表意音「大きい」

現在のスワヒリ語には，形容詞語幹の -bovu「腐った」，-kavu「乾いた」，-bivu「熟した」に対して，動詞 -oza「腐る」，-kauka「乾く」，-iva「熟す」がある。語源的には同じ動詞から派生したものであるが，共時的には形容詞語幹と動詞という別のカテゴリーを形成している。同じように形容詞語幹 -nene「太い」，-oga「臆病な」に対して，動詞-nenepa「太る」，-ogopa「怖がる」があるが，これらは派生接辞 -p- がついて形容詞語幹から動詞が派生された例である。現在のスワヒリ語では派生接辞 -p- に生産性はなく，語彙的なものとしてとらえられる。また，-chafu「汚い」に対して，動詞の基本語尾 -a のついた -chafua「汚す」という動詞があるが，これも共時的には生産性のある派生関係ではない[7]。

スワヒリ語では，共時的には非生産的な接辞 -p- によって形容詞語幹から動詞が派生されるという過程があった。現在のスワヒリ語にはこのような対応関係の例は少ないが，他のバントゥ諸語ではスワヒリ語の -p- に相当する接辞で派生された動詞がかなりみられ

---

[6] Schadeberg (2003:149-150) にあげられているバントゥ祖語の形容詞語幹は次の通り。
* -jijá「良い」 * -bíɪ「悪い」 * -jípí「短い」 * -dai「長い」
* -bícɪ「未熟の」 * -díto「重い」 * -gima「全体の」 * -jíngɪ「多い」 * -ngá「いくつの」
* -moi「一つの」 * -balí /-bɪlí「二つの」 * -tátʊ「三つの」 * -nai「四つの」 * -táano「五つの」

[7] 現在のスワヒリ語の生産的な派生には，使役形接辞 -(i)sh- や状態形接辞 -(i)k- に動詞語尾-a をつけて派生させるものがある（例 : fupisha「短くする」，fupika「短くなる」，safisha「きれいにする」，sahihisha「正す」など）。これらの接辞は本来，動詞語幹につく派生接辞であるが，形容詞語幹の他，名詞や副詞などにもついて動詞を作り，非常に高い生産性をもつ。

る。(19)にケレウェ語（派生接辞は-h-/-hal-），(20)にベンデ語（派生接辞は-h-/-k-）の例をあげる[8)]。

(19)	形容詞語幹	＞	動詞
	-bhí「悪い」		-bhííha
	-ké「少ない」		-keeha
	-zíto「重い」		-zitoha
	-angu「身軽な」		-anguha
	-gazi「広い」		-gazihala
	-gufu「短い」		-gufuhala
	-lofu「汚い」		-lofuhala

(20)	形容詞語幹	＞	動詞
	-bhií「悪い」		-bhiíha
	-seé「小さい･少ない」		-seéha
	-tofú「短い」		-tofúhá
	-kalí「鋭い」		-kalihá
	-pííná「貧しい」		-píínáha
	-fyǔ「熱い」		-fyǔha
	-háfú「軽い」		-háfúká

スワヒリ語にはなくなっているが，ケレウェ語やベンデ語をはじめ，多くのバントゥ諸語の動詞には完了語尾があり，動詞の完了語尾形が形容詞的な意味を叙述するのに用いられることがある。また，完了語尾形が関係主語接辞とともに修飾にも用いられる。たとえば次のケレウェ語の例では，形容詞語幹を用いた修飾と完了語尾形を用いた修飾が同じ意味を表している。

(21) omu-ntu mu-zíto = omu-ntu a-zitóh-ile 「重い人」
NP1CL-人 NP 1CL-重い NP1CL-人 REL1CL-重くなる-PE

ケレウェ語には，(19)のような派生動詞の他に，下の(22)のような動詞も形容詞的な意味を表すのに用いられる。

(22)a.	-gúma	「固い」	-semela	「良い」	-ibhumba	「丸い」
	-tukula	「赤い」	-ilagula	「黒い」	-ela	「白い」
b.	-saalila	「苦い」	-nula	「おいしい」	-nulilila	「甘い」

これらの動詞が叙述や修飾に用いられる場合，(22a)の動詞は完了語尾のついた形で，(22b)の動詞は現在進行を表す時制接辞を伴った形であらわれる。ただし，-ela「白い」はどちらの形でもあらわれ得る。修飾の例をみてみよう。

8) ケレウェ語の出所は小森(2003)，ベンデ語の出所は阿部(2006)。いずれの例も動詞の意味は「（形容詞語幹の意味）になる」を表す。表記 bh の音声は [β] である。

(23)a. i-tí eli-gúm-ile 固い木
NP5CL-木 REL5CL-固い-PE
b. omw-énda ogw-ilágw-ile 黒い服
NP3CL-服 REL3CL-黒い-PE
(24)a. omu-tí ogu-kú-saalila 苦い薬
NP3CL-薬 REL3CL-PRS-苦い
b. omw-énda ogu-kw-éla ＝ omw-énda ogw-ez-íle 白い服
NP3CL-服 REL3CL-PRS-白い NP3CL-服 REL3CL-白い-PE

ケレウェ語にはさらに，(22a)の動詞から派生されたと考えられる形容詞語幹がある。それは-gume「固い」，-mutuku「赤い」，-mwiláguzu「黒い」，-mwéla「白い」であり，たとえば(23)は形容詞語幹を用いて，以下のような表現にも言い換え可能である。

(25)a. i-tí i-gume 固い木
NP5CL-木 NP5CL-固い
b. omw-énda gu-mwiláguzu 黒い服
NP3CL-服 PP3CL-黒い

つまり，ケレウェ語の例をまとめると，現在の形容詞語幹には，バントゥ祖語からのもの（例：-bhí「悪い」，-zíto「重い」など）と，動詞から派生されたもの（例：-gume「固い」，-mwiláguzu「黒い」など）があり，それはスワヒリ語と同じであるが，それに加えて，動詞の完了語尾形（例：-zitóh-ile「重い」，-gúm-ile「固い」，-ilágw-ile「黒い」など）による修飾も可能であり，(21)や(23, 25)の例のように，同じ意味を表す形容詞語幹と動詞の完了語尾形による言い換えが可能な場合があり，その点がスワヒリ語とは異なっているということである。

また，動詞から派生された形容詞語幹であっても，その派生過程が異なるものがあると考えられる。ケレウェ語の色を表す形容詞語幹（-mutuku「赤い」，-mwiláguzu「黒い」，-mwéla「白い」）を，もとになった動詞（-tukula, -ilagula, -ela）と比べてみると，mu-という接頭辞がついて語彙化していることが分かる。つまり，動詞から接頭辞のついた名詞の形に派生したのちに形容詞語幹になったのではないかと考えられるのである。このような違いは，形容詞語幹がとる接頭辞の違いにも表れている。(25)の例からも分かるように，ケレウェ

語の色を表す形容詞語幹は,名詞接頭辞ではなく代名詞接頭辞をとる。代名詞接頭辞とは,主語接辞と同じかそれに準じた形の接頭辞であり，典型的には指示詞や所有詞がとる接頭辞であるが，その他の修飾語（たとえばスワヒリ語では「どの」,「すべての」などの語,ケレウェ語では「他の」,「〜だけ」,「いくつの」などの語）もとる。

ベンデ語でも，色の形容詞語幹は代名詞接頭辞をとる。名詞接頭辞をとる形容詞語幹 -kulú「大きい」と比較して，見てみよう。

(26) ベンデ語の色を表す形容詞語幹： -ábhé「赤い」， -ápí「黒い」， -áswé「白い」

má-jábhó ghá-ábhé 「赤い果物（熟れた果物）」
NP6CL-果物 PP6CL-赤い

cf; má-jábhó má-kulú 「大きい果物」
NP6CL-果物 NP6CL-大きい

ベンデ語では色の形容詞語幹は動詞や表意音から派生されていると考えられるが，いずれも á-という接頭辞がついて語彙化している。

このように形容詞語幹になる過程で接頭辞がついたまま語彙化したと考えられる例はズールー語にもみられる。(27)はズールー語の色を表す語（「黒い」,「白い」）である[9]。ズールー語でもこれらの形容詞語幹は名詞接頭辞をとらないが，代名詞接頭辞ではなく関係主語接辞をとる。名詞接頭辞をとる形容詞語幹「大きい」と比較して示す。

(27) -mnyama「黒い」，-mhlophe「白い」

ama-tse a-mnyama 「黒い石」
NP6CL-石 REL6CL-黒い

cf; ama-tse ama-khulu 「大きい石」
NP6CL-石 NP6CL-大きい

代名詞接頭辞や関係主語接辞のように名詞接頭辞でないものをとるこれらの形容詞語幹は，名詞経由の派生形ではないかと考えられる（ズールー語の「黒い」の語幹は直接，名詞から派生されているように見える)。ズールー語には直接，名詞から派生されている形容詞語幹が多くある。ズールー語の「赤い」の語幹は -bomvu であるが，これは名詞 ibomvu

9) 出所は Taljaard & Bosch (1988:101)。ズールー語の表記 hl の音声は [ɬ]（無声側面摩擦音），ph, kh はそれぞれ [p, k] の有気音である。

「赤土」の語幹である。他に-lukhuni「固い」（＜ ukhuni「薪」），-manzi「湿った」（＜ amanzi「水」），-luhlaza「緑色の」（＜ uhlaza「草」）などの例がみられる（これらの形容詞語幹も関係主語接辞をとる）[10]。

このようにしてみると，バントゥ諸語では祖語からの本来の形容詞語幹の少なさを補うように，動詞や名詞から形容詞語幹が派生されてきたと考えられる。またスワヒリ語に見られるように，アラビア語などの他言語からの借用がそれを補っているとも言える。

4. まとめ

以上，限られた言語の例ではあるが，ヨルバ語とバントゥ諸語の「形容詞」についてみてきた。確かに，アフリカ諸語には動詞や名詞から独立して「形容詞」と呼べるカテゴリーを立てることは難しく，動詞や名詞とオーバーラップするところが大きいかもしれない。しかし，Dixon(2004) がその冒頭で述べているように，「どの人間言語にも『形容詞』という独自の語類を認めることができる」という視点からみれば，形容詞の中核的な意味を表す語類に何らかの特徴を見出すことはできる。ヨルバ語ではその語類には，2 章末で見たように，修飾用法にしか用いられない ńlá「大きい」と rere「良い」が入り，加えてそこに，動名詞形の不規則形を含めることができるだろう。ńlá と rere がおそらく動名詞形の不規則形から修飾用法専用の「形容詞」に変化してきたことを考えると，不規則形を「動名詞形」という動詞のサブカテゴリーにおいておくのではなく，独立した「形容詞」というカテゴリーに再分類することも可能である。

バントゥ諸語では，形容詞の中核的な意味を表す語類は，修飾する名詞と同じ名詞接頭辞をとる「形容詞語幹」によって表されると言える。形容詞語幹は祖語にさかのぼれるものに加えて，動詞や名詞から派生されたものを多く含んでいるが，その中でも，より中核的なものは動詞から派生されたものであると言えよう。名詞から派生されたものは名詞接頭辞とは異なる接頭辞をとることがあり，またスワヒリ語のように借用語は接頭辞をとらなかったりする。

1 章で示した形容詞の意味分類においては，色を表す語は中核的なものであるが，バントゥ諸語においては，語源的には形容詞語幹の中心をなすものではなかったと言える。アフリカ諸語において色を表す語の基本は，白・黒・赤の 3 つで，おそらくどの言語にも基

10) ズールー語（およびングニ諸語）学では，これらの語幹は形容詞語幹ではなく「関係語幹」と呼ばれる（神谷俊郎氏，私信）。

本語彙として，この 3 つの語を見出すことができるが，バントゥ諸語の動詞や表意音から派生された語幹をみると，形容詞語幹としてはもともと中心的なものではなかったと考えられよう。

以上のように，ヨルバ語やバントゥ諸語に「形容詞」というカテゴリーを認めた場合，そのカテゴリーに含まれる語の中心は，名詞より動詞から派生されたものが多く占めるであろうと言うことができる。今後，さらに他言語の「形容詞」について検討し，アフリカ諸語における「形容詞」の位置づけと特徴について考察を深めていきたい。

参考文献

Dixon, R.M.W. 2004. “Adjective Classes in Typological Perspective,” in Dixon, R.M.W. & Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective Classes - A Cross-Linguistic Typology*, New York: Oxford University Press, pp.1-49.

Madugu, Isaac S. George. 1976. “Yoruba Adjectives Have Merged with Verbs: or Are They Just Emerging?”, *Journal of West African Languages*, Vol.11 (No.1-2), pp.85-102.

Schadeberg, Thilo C. 2003. “Derivation (Ch.5), Historical Linguistics (Ch.9)”, in Nurse, Derek & Gerard Philippson(eds.) *The Bantu Languages*, London: Routledge, pp.71-89, 143-163.

Taljaard, P.C. & S.E.Bosch. 1988. *Handbook of Isizulu*, Pretoria: J.L.van Schaik (Pty) Ltd.

阿部優子. 2006. 『ベンデ語（バントゥ F.12，タンザニア）の記述研究－音韻論，形態論を中心に－』，東京外国語大学博士論文.

小森淳子. 2003. 『ケレウェ語の記述研究－文法・接触による変容・言語文化－』，京都大学博士論文.

清水紀佳. 1988. 「アフリカの諸言語」,『言語学大辞典』第 1 巻，東京：三省堂，pp.237-439.

松本克己. 2006. 「第 15 章　形容詞の品詞的タイプとその地理的分布」,『世界言語への視座－歴史言語学と言語類型論』，東京：三省堂，pp.313-320.